

これからの生活科授業で求められる学びのあり方

～様々な資質・能力の育成とスタートカリキュラムの実現～

上越教育大学大学院学校教育研究科教授 木村吉彦

(広島大学附属小学校学校教育研究会『学校教育 2016年11月号』所収)

はじめに

「小学校学習指導要領」の改訂がいよいよ迫ってきている。そこで、本稿では、これから求められる生活科学習のあり方をより具体的に提案させていただく。本稿の内容は、Ⅰ．指導要領改定のキーワードと生活科とのかかわり、Ⅱ．生活科を中核としたこれからの小学校低学年教育、Ⅲ．これからの生活科が求める資質・能力、Ⅳ．これからの生活科のあり方をめざす実践事例、と4項目に従って「これからの生活科授業で求められる学びのあり方」を提案する。

Ⅰ 指導要領改定のキーワードと生活科とのかかわり

『学校教育 2016年4月号』においても記述していただいているが、指導要領改訂のキーワードは「アクティブ・ラーニング」に基づく「資質・能力の育成」である。「アクティブ・ラーニング」を活かした幼児教育と小学校教育の接続については、『初等教育資料 2016年4月号』において、小川聖子が次のような見解を示している¹⁾。

- (1) 幼児教育と小学校教育の接続に関してはスタートカリキュラムを含む、低学年の全ての教科において幼児教育との接続を意識した教育課程を編成することが求められる。また、保育所や幼稚園等との交流・連携も積極的に進めたい。
- (2) 次期学習指導要領の視点は、子どもたちが「何を知っているか」だけでなく、「知っていることを使ってどのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということであり、知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力や人間性など情意・態度等に関わるもの全てを、いかに総合的に育んでいくということが重要である。
- (3) 子どもの学びに向かう力を刺激するためには、実社会や実生活に関わる主題に関する学習を積極的に取り入れることや、「体験活動」の充実を図り、その成果を振り返って次の学びにつなげていくことなども引き続き重要である。

「アクティブ・ラーニング」を意識した上記の考え方は、基本的に「生活科のこれからのあり方」に結びつく²⁾。「課題を自ら発見し、解決に向けて主体的ならびに協働的に学ぶあり方」が「アクティブ・ラーニング」であるが、そのめざす目標は、「必要な資質・能力の明確化」と「資質・能力の教師理解のあり方（見取り方）」である。これらは、生活科を中核とした「スタートカリキュラム」の課題そのものであり、幼児期の遊びから始まり、小学校以降の教科学習においても、発達段階に応じた「資質・能力の育成」がこれからの学校教育課題（とりわけ生活科学習のあり方）そのものである。

Ⅱ 生活科を中核としたこれからの小学校低学年教育

ー幼保小連携の重要性とスタートカリキュラム実現ー

子どもにとって小学校への入学とは、遊び中心の生活から（教科）学習中心の生活へと生活スタイルが大きく変わることである。幼児期の子どもたちは遊びながら様々な資質・能力を身に付け、小学校以降には教科学習を中心として学び、やはり様々な資質・能力を身に付ける。遊びを通した学びと教科学習を通した学びの両方をつなぐのが生活科である。本稿は、子どもの発達や学びの連続性を大切にする生活科の教科特性と、接続期カリキュラムの意義を明確化することで、これからの幼保小連携の展望を明らかにすることを目的とする³⁾。

1. 幼児教育と小学校教育をつなぐ生活科

ここでは、教育の「目的論」「方法論」「評価論」の3観点から、生活科の教科特性を明らかにする。

（1）教育目的の観点から

生活科の究極的な教科目標は「自立への基礎を養う」である。人間が社会的に独り立ちするための基礎的部分を育てるという子ども像と育てたい方向性が示されている。これは明らかに「方向目標」（幼児教育目標の中心）である。しかし、実際の授業では、独り立ちするための資質・能力を「到達目標（行動目標）」（小学校教育目標の中心）として設定して授業を展開して構わない。すなわち、**生活科の教育目標は到達目標を内に含んだ方向目標**である。

（2）教育方法の観点から

例えば、「秋をさがそう」という単元では、「秋を見つけさせたい」という教師のねらいが反映された公園という（物的）教育環境に子どもを連れて行き、子どもが自分から秋を見つけたくなるよう言葉がけをして授業を行う。これは、まさしく「間接教育」（幼児教育方法の中心）の考え方による教育方法である。一方、教室に戻ると、作文シート等に今日の活動や感想を書く時間を設ける。このとき教師は、「シートに作文書いてね」と直接指示をする。生活科の教育方法の基本は間接教育であるが、**適宜直接教育（小学校教育方法の中心）を取り入れた指導も行われる。**

（3）評価論の観点から

生活科では対象が小学校低学年であるので、他児との比較によるのではなく、まさにその子の伸びを認めて褒めてあげる「個人内評価」（幼児教育評価の中心）が基本である。しかし、小学校なので「指導要録」には「評価規準」に基づく「ABC評価」を書く必要がある。生活科の評価は評価規準を前提とした個人内評価（絶対評価）である。

以上のように、生活科は、**幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科であり、幼保小連携の鍵を握る教科**である。この生活科の教科特性こそが、我が国において実現が求められている小学校でのスタートカリキュラムの中核を担う必然性を意味する。

2. これからの実現が求められているスタートカリキュラムの意義

スタートカリキュラムとは、新入児童の入学直後約1ヶ月間において、子どもが幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのことである。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、子どもに「明日も学校に来たい」という意欲をかき立

て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらし、新入児童の小学校へのスムーズな「適応」を促すことが期待される。これがスタートカリキュラムの第一の意義である。これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信（＝自己肯定感）がもてるきっかけになる。**自分の人生を主体的に生き抜くためのスタートラインがスタートカリキュラム**である。これが第二の意義である。

Ⅲ これからの生活科が求める資質・能力

本節では、生活科の教科特性に基づき、これからの生活科授業において低学年児童に身に付けてほしい資質・能力を明確化する。最終的には、「自分の人生を主体的に生き抜く力＝生きる力」の基礎が「自立への基礎」である⁴⁾。

1. 主体性の育ち

（1）体験重視に基づく自己選択・自己決定力

生活科は、我が国における教科観の転換を迫る新教科であった。生活科以前の教科とは、何らかの学問的な背景つまり人類の知的遺産が前提である。それに対して、生活科は従来教科のような学問的裏付けがない。学習は学習指導要領に記載されたねらいと内容に基づいてはいるが、実際には、目の前の子どもたちが何に興味・関心をもち、どんな活動を望んでいるのか、といった「子どもの実態」から学習が始まる。そのために、生活科では、児童一人一人の体験を重視している。

このような学習の在り方は、「活動の大枠（飼育か栽培か）は教師が決めるが、具体的な学習内容は子ども自身に任せ、自分で決めることができる」という学習形態である。自己選択・自己決定の機会の提供により、「思考力と主体性を備えた児童の育成」をめざしている。

（2）自分自身を学習対象とすることによる自己認識

生活科では、「自分自身への気付き」（自己認識）を最も大切にする。体験によって「わかるようになったぼく・わたし」「できるようになったぼく・わたし」に気付き（意識・自覚し）、「自己肯定感」が高まる。それが、「生きる自信＝自立への基礎」へとつながる。「自立」とは「社会人としての独り立ち」を意味していると筆者は考えている。それは、主体性を前提としつつ、学習対象や人とのかわりも大事にして、自分を発揮して生きることである。

（3）主体的な学習意欲

生活科においては、子どもにとって「学ぶ必然性のある学習（機会）」の提供によって、「なぜ勉強するの？」への回答が得られるようになる。充実した体験を基に、「作文に書き出したいから文字・漢字を覚える」、「正確に長さや重さや数を知りたいから単位（cm,g）や数え方を覚えたい」という他教科の客観的な学習と主体的に結びつく。生活科は、児童にとって他者から強制されたり、一方的に教えられたりして学習するのではない。自分で見付けた課題を自分の力で解決するために、自ら考え、自ら学ぶ力を養うことが重要である。この力が「探究的な学習」につながるのである。

2. 社会性の育ち

1の（2）でも述べたが、生活科とは、体験によって主体性・社会性が同時に育つことを

めざす教科である。ここで強調したいのは、グループ活動中心の体験が社会性をはぐくむ、ということである。とりわけ、活動のプロセスを大切にする「協働的な学習」を重視していただきたい。生活科において、グループによる体験活動を仕組むことで協調性をはぐくめるが、それに「協働的な学習」を取り入れることで、子ども同士の思考力を高めたり、コミュニケーション能力を高める体験学習にすることで、より豊かな社会性をはぐくむことができる。例えば、探検単元・遊び単元・飼育・栽培単元などにグループ活動を取り入れることで、協調性・伝達力・自己表現力・思考力・コミュニケーション力など、社会人として必要な人間性（＝豊かな社会性）をはぐくむことができる。

3. 質の高い「気付き」

生活科体験では、自分とのかかわりで自然・社会・自分自身について学ぶことになる。主観知（個人の思い）の尊重によって、客観的な認識（客観知）の基礎＜従来教科学力との関連＞が可能になる。このことは「気付きの質を高める」ことを意味し、科学的な見方・考え方の基礎を養うきっかけとなる。つまり、生活科は気付いて（気付かせて）終わりではない、ということである。生活科における「気付き」には、「対象への気付き」と「自分自身への気付き」の2種類がある。そこで、「気付きの質を高める」の意味するものは、「対象への気付き＝主観知から客観知へ」「自分自身への気付き＝その都度の自分の思いへの自覚から自分の成長への自覚」と筆者は考えている。

4. 自己表現力…諸感覚の育成に基づく多様な表現力の育ち

「体験を通すこと」の特徴とは、①自分とのかかわりで動き、調べ、知り、学ぶこと、②心身をフルに使うので「実感」をもって理解すること、の2つである。特に重要なのは、目・口・耳・鼻・手・心というすべての感覚を通しての観察に基づく自己表現力を育成することである。児童の素直な気持ちを自由に表現できる場の設定は必要不可欠であり、言語能力が発達過程にある低学年児童にとって、身体全体を用いた表現活動は非常に適したものである。諸感覚の育ちから気付きの質が高まり、思考力・判断力・表現力すべての育ちにつながる。学習対象への愛着がもたらす表現意欲の高まり、他教科との関連による自己表現力の充実、そして既に述べた主体性と社会性の育ち、これら児童の成長の姿は、生活科がめざす「自立への基礎」が養われたことを意味する。

5. 日常生活への活用力…「よりよき生活者」の育成

「自分の日常を見つめ、その中で見いだした課題を自分自身の力で解決しようとする豊かな人間づくり」も「自立への基礎」をめざす内容である。飼育・栽培活動に象徴されるように、毎日の課題（えさやり・水やり等）に積極的に取り組むことで、日々の日常的課題に対し必然性をもって取り組める児童が育つ。活動や体験を通して全人的に子どもを豊かに育てることをめざす生活科こそが「生きる力」育成の切り札である。

IV これからの生活科のあり方を目指す実践事例

ースタートカリキュラムの実践例（長野県茅野市）ー

1. 学校探検に基づく生活科の他教科関連重視

茅野市の小学校におけるスタートカリキュラムでは、1時間目が遊び重視、2時間目が学校探検中心の学習展開である⁵⁾。筆者が直接参観した授業では、2時間目が音楽室への学校探検であった。音楽室では2年生が授業を行っており、はじめに1年生は2年生の音

楽授業を参観したが、参観後2年生と共に「ひょっこりひょうたん島」の歌に合わせて踊りを行っていた。はじめは、音楽との関連である。2年生の音楽授業が終了した後、担任は、1年生新入児童に「楽器が色々あるね、一人で3つの楽器を探してね」と提案した。1年生たちは、それぞれの興味・関心に従って楽器を探し、名前を確認していた。ここで「3つ」という具体的な数字が提案されていたのは、算数の「数の数え方」に明らかにつながっている。そして教室に戻り、それぞれが見付けた楽器についての発表が始まった。ある児童が「鈴」を発表した。すると、担任は自分が創っていた写真を黒板に貼り出した。「6個の鈴」写真である。その写真をもとに「1, 2, 3, 4, 5, 6」と児童と共に数え、「6」という数字を板書した。昨日までは、「5」までの数字学習だったようであるが、当日は「6」という数字学習に進めて「算数」への興味・関心を高めていた。

一方、次は文字学習である。児童たちが見付けた楽器のうち、担任は「てっきん」と「もっきん」を板書し、「同じ文字はどれ？ 違う文字はどれ？」と質問していた。同じ文字は「つ」と「き」と「ん」、違う文字は「て」と「も」であることは明らかである。このような振り返りに基づき、児童全員で黒板の「てっきん」と「もっきん」を大きな声で読み出した。これは、文字への好奇心を高めるための明らかな「国語」学習であった。

このように、スタートカリキュラムに学校探検（生活科単元）を取り入れることで、様々な教科学習への興味・関心及び好奇心を引き出し、他教科関連を重視するのが生活科を中核とするスタートカリキュラムの意義である。

2. スタートカリキュラム実施における様々な領域等との関連重視

Ⅳの1では、教科学習との関連を示したが、生活科重視のスタートカリキュラムは、それだけではない。1時間目の遊び中心の時間では、担任は「読み聞かせ」から始めていた。「読み聞かせ」とは、新入児童たちが幼児教育の時期に日々体験していた絵本体験である。これまでの自分たちの体験をそのまま認めて実施してもらえることで、児童たちは「僕たち・私たちのこれまでの活動を認めてくれているのだ」と自己肯定感（＝自信）を高めている。この思いは、「明日も学校に来たい」という登校意欲を引き出している。そして、「読み聞かせ」の次は「じゃんけん列車」という遊びであり、じゃんけんを通してグループ作りを行っていた。この遊び活動は、明らかに「人間関係づくり」への貢献である。他校においても、様々なグループ作りの遊び活動が行われているが、すべてが人数の数え方（算数）も含めた人間関係づくり活動である。

さらに、学校探検においては、廊下や階段の進み方について担任が事前にルール説明をしていた。「他のクラスの皆さんはもう勉強を始めているので、廊下でべちゃくちゃおしゃべりしたり、どたばた走ったりしたら、皆さんに迷惑をかけてしまいますね」という説明である。これは、明らかに小学校生活における日常生活習慣の問題である。「ソーシャル・スキル・トレーニング」という言葉もあるが、日々の学校生活におけるルールやマナーについて、探検を通して提案をすることで、新入児童の小学校生活習慣を身に付けることにつながるのである。

このように、生活科を中核としたスタートカリキュラムの実施は、他教科学習との関連のみならず、小学校生活全般にかかわる生活習慣を新入児童に提案できることも重要な存在価値である。

3. スタートカリキュラムの教育課程

これまでの実践例における教育課程は次の通りである。

茅野市幼保小連携スタートカリキュラム研修会でのカリキュラム事例

第3週～4週の予定

茅野市立金沢小学校

	時間	15日(月)	16日(火)	17日(水)	18日(木)	19日(金)	22日(月)	23日(火)	24日(水)
朝	8:20	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察	健康観察
1	8:20 ～ 9:30	なかよしタイム							
		絵本・歌・ ゲーム	絵本・歌・ ゲーム	絵本・歌・ 自己紹介	絵本・歌・ 体操	絵本・歌・ ゲーム	絵本・歌・ 自己紹介	絵本・歌・ ゲーム	絵本・歌・ 自己紹介
2	9:35 ～ 10:20	一年生迎 える会発 表練習	学校探検						
		音楽室	図書館	職員室	調理室 家庭科室	校庭	用務員の 先生のお 仕事	学校体験 わくわく 発表会	
3	10:45 ～ 11:30	なかよし 旬間はじ めの会	国・算	国・算	国・算	国・算	国・算	国・算	国・算
4	11:35 ～ 12:20	一年生を 迎える会	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導	給食指導
5	2:05 ～ 2:50	国・算	遊び単元						
		体育館	体育館 (6年生 と一緒に)	砂場	小庭 遊具	金沢公園	校庭	図書館 オリエン テーショ ン	

おわりに

本稿では、これから求められる生活科学習のあり方を「資質・能力の育成」と「スタートカリキュラムの実践例」をもとに述べさせてもらった。「資質・能力の育成」は、生活科が新設された時点からの教育目標であり、めざすもののそのものである。生活科の教科特性を全国の教育担当者にご理解いただき、「めざす子ども像」をしっかりと意識してこれからの小学校教育に取り組んでもらいたい。

【引用・参考文献】

- 1) 小川聖子「学校の教育現場はどう変わらなければならないか」『初等教育資料 2016年4月号』pp.34-35
- 2) 木村吉彦監修・長野県茅野市教育委員会編『実践 接続期カリキュラム』pp.9-10, ぎょうせい, 2016
- 3) 木村吉彦「これからの幼保小連携」(全国市町村教育委員会連合会/編集『時報 市町村教委 平成27年9月号』ぎょうせい, pp.2-4
- 4) 木村吉彦「これからの生活科教育で身に付けてほしいこと」広島大学附属小学校研究誌『学校教育 2014年10月号』pp.14-21
- 5) 文献2)『実践 接続期カリキュラム』pp.20-22

スタートカリキュラムの実現を目指すこれからの生活科

〔生活〕〈小学校〉

上越教育大学大学院教授 木村吉彦

はじめに

生活科の改訂は、今回が3回目である。新設（平成元年）されてから30年近くなり、本格実施（平成4年）から25年目を迎えている。他教科との違いがなかなか全国の先生方からしっかり理解されていない実態を感じている筆者は、今回の改訂のポイントから解説し、生活科にふさわしい「見方・考え方」とこれからの授業のあり方についての提案をさせていただく。生活科改訂の中心キーワードの1つが「スタートカリキュラム」とであると捉えてほしい。

①改訂の方向性と改善のポイント

生活科では、次の4点について、さらなる充実を図ることが期待されている。

- 1) 活動や体験を通して低学年らしい思考や認識を確実に育成し、次の活動へつなげる学習活動を重視すること。
- 2) 幼児教育において育成された資質・能力を存分に発揮し、各教科等で期待される資質・能力を育成する低学年教育として、なめらかに連続、発展させること。幼児期に育成する資質・能力と小学校低学年で育成する資質・能力とのつながりを明確にし、そこでの生活科の役割を考える必要がある。
- 3) 幼児教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラムについて、生活科固有の課題としてではなく、教育課程全体を視野に入れた取り組みをすること。スタートカリキュラムの具体的な姿を明らかにするとともに、国語、音楽、図画工作などの他教科等との関連についてもカリキュラム・マネジメントの視点から検討し、学校全体で取り組むスタートカリキュラムとする必要がある。
- 4) 社会科や理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続を明確にし、単に中学年の学習内容の前倒しにならないよう留意しつつ、育成を目指す資質・能力や「見方・考え方」のつながりを検討する必要がある。

②生活科の特性に応じた「見方・考え方」

生活科における資質・能力の三つの柱とは、「知識や技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性」である。こうした資質・能力を育むために、生活科の目標としては、具体的な活動や体験を通して、「身近な生活にかかわる見方・考え方」を生かし、自立して生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することである。「自立」とは「社会人としての独り立ち」とであると、木村は考えている（主体性のみの「独

り立ち」ではない)。主体性と社会性を同時並行的に育てていただきたい。

これらを踏まえ、生活科における「見方・考え方」とは、次のような内容である。

- 1) 生活科では、具体的な活動や体験を通して、児童の生活圏に存在する身近な人々、社会及び自然を学習の対象として扱う。その際、対象を自分とのかかわりで捉えるとともに、人々、社会、自然を一体化して捉えることが重要である。
- 2) 具体的な活動や体験を通して捉えた対象については、比較、分類、関連付けなどして解釈し把握するとともに、試行、予測、工夫したりなどして新たな活動や行動を創り出していくことを通して、自分自身や自分の生活について考え、そこに新たな気づきを生み出すことを期待している。こうして児童はそれぞれの対象のよさや特徴、自分との関係や、対象とのかかわりに気付いていく。
- 3) これらを踏まえ、生活科の特質に応じた「身近な生活にかかわる見方・考え方」とは「身近な人々、社会及び自然を自分とのかかわりで捉え、比較、分類、関連付け、試行、予測、工夫することなどを通して、自分自身や自分の生活について考えること」である。

③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践方策

アクティブ・ラーニングの視点に基づく生活科の授業改善は、児童の思いや願いを実現する体験活動を充実させるとともに、表現活動を工夫し、体験活動と表現活動との相互作用を意識することが重要である。この発想に基づき、3つの観点について実現のあり方を説明する。

(1)「主体的な学び」の視点

- ・生活科では、子どもの生活圏である学校・家庭・地域を学習の対象や場とし、対象と直接関わる活動を行うことで、興味や関心を喚起し、自発的な取り組みを促してきた。こうした点に加え、表現を行い、伝え合う活動の充実を図ることが必要である。
- ・小学校低学年は、自らの学びを直接的に振り返ることは難しく、相手意識や目的意識に支えられた表現活動を行う中で、自らの学習活動を振り返る。振り返ることで自分自身の成長や変容について考え、自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性について気付いていく。自分自身への気づきや自分自身の成長に気付くことが、自分はさらに成長していけるという期待や意欲を高めることにつながる。
- ・学習活動の成果や過程を表現し、振り返ることで得られた手応えや自信は、自らの学びを新たな活動に生かし挑戦していこうとする子どもの姿を生み出す。こうしたサイクルが「主体的な学び」に向かう力を育成するものとして期待できる。

(2)「対話的な学び」の視点

- ・生活科では、身の回りの様々な人々と関わりながら活動に取り組むことや、伝え合ったり交流したりすることが大切である。伝え合い交流する中で、一人一人の発見が共有され、そのことをきっかけとして新たな気づきが生まれたり、関係が明らかになったりする。他者との協働や伝え合い交流する活動は、一人一人の子どもの学びを質的に高めることにつながる。
- ・双方向性のある活動が行われ、対象と直接関わり、対象とのやり取りをする中で、感じ、考え、気付くなどして「対話的な学び」が豊かに展開されることが求められる。

(3)「深い学び」の視点

- ・生活科では、思いや願いを実現していく過程で、一人一人の子どもが自分との関わりで対象を捉えていくことが特質であると言える。
- ・「身近な生活に関わる見方・考え方」を生かした学習活動を充実することで、気付いたことを基に考え、新たな気付きを生み出し、関係的な気付きを獲得するなどの「深い学び」を実現することが求められる。低学年らしいみずみずしい感性により感じ取られたことを、自分自身の実感の伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連づけて捉えようとするのを助けるような教師の関わりが求められる。

④これからの授業づくりのあり方

生活科における児童の資質・能力を育む学習過程は、「やってみたい、してみたい」と自分の思いや願いを持ち、具体的な活動や体験を行い、直接対象とかかわる中で感じたり考えたりしたことを表現し、行為していくプロセスと考えることができる。一人一人の思いや願いを実現していく一連の学習活動を行うことにより、児童の自発性が発揮され、一人一人の児童が能動的に活動するようになること、体験活動や表現活動とが繰り返されることで児童の学びの質を高めていくことが重要である。

この考え方に基づき、具体的な授業づくりのあり方は、次の4点である。

- 1) 地域は、児童にとって生活の場であり学習の場である。地域の文化的・社会的な素材や活動の場などを見いだす観点から地域の環境を繰り返し調査し、それらの素材を教材化して最大限に生かすことが重要である。
- 2) 飼育動物や栽培植物といった生きた教材は、児童にとって直接的な体験の機会が減っている中で大きな意義を持つものであり、引き続き充実を図ることが必要である。
- 3) スタートカリキュラムについては、入学当初の児童の生活面の支援に関する人的なサポートも含め、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせるカリキュラム・マネジメントが重要となる。校区内の公立私立幼稚園等との連携体制、教育委員会と首長部局の連携も望まれる。
- 4) 児童の体験的な活動を重視した学習を実施するため、学校内外の様々な人的な協力、交流が必要となる。学校と地域の円滑な協働体制の構築、関連する施設との連携、獣医師等の専門家の協力も必要である。

(本稿は、無藤隆・『新教育課程ライブラリ』編集部／編『中教審答申解説2017「社会に開かれた教育課程」で育む資質・能力』<ぎょうせい>所収、平成29年2月刊行、です。)

すべては、子どもたちのために

平成28年度 木村ゼミ学修成果報告書

2017年3月 発行

編集・発行 上越教育大学大学院 木村吉彦研究室

〒943-8512 上越市山屋敷町1番地

電話&Fax: 025-521-3350
